
おごりジュース

優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

おごりジュース

【Nコード】

N3008B

【作者名】

優

【あらすじ】

啓太はいきなり来た転校生とジュースをかけて勝負をする。

「おはよう、啓太^{けいた}。今日も遅刻ギリギリだな。明日から朝早く学校にきてバスケやらないか？汗をかくと元気が出るぜ！」

声をかけてきたのは同じクラスの森岡^{もりおか}だ。森岡は頭はものすごく悪いが運動はものすごく得意という極端なやつだ。

「おはよう、森岡。悪いが朝はゆっくりしたいんだ。昼休みならいくらでもバスケやってやるから。」

俺がそう言った後、森岡がさびしそうに言った。

「そっか、朝はやっぱりつらいよな。じゃあ昼休みに思いっきりバスケやろうぜ。」

「おう！」

チャイムが鳴ったので俺と森岡は席に着いた。

担任の先生が教室に入ってきて黒板に人の名前を書き始めた。

「えーと、転校生を紹介する。速人^{はやと}君、入ってきなさい。」

教室のドアがガラガラと音を出して開いた。

「神速人^{じんじん}君だ。仲良くしてやれよ？では速人君、軽く自己紹介しなさい。」先生の言葉の後、転校生が口を開いた。

「神速人です。青葉第二中学から来ました。前の中学では陸上部に入っていました。よろしくお願いします。」

「はい、速人くんの席は森岡の後ろだ。」

転校生は森岡の後ろに案内されて静かに座った。チャイムが鳴り、休み時間になった。

森岡と転校生が話をしていたので行ってみた。

「何話してんだ？森岡。」

「速人ってさ、足が早いらしいぜ！だから、昼休みに1000M走で勝負しようぜ、って話してたんだよ」

森岡が楽しそうに話した。

「あ、こいつは啓太。いつも遅刻ギリギリに登校してくるんだ。趣味は勉強！」

「何言ってるんだよ。趣味が勉強のはずないだろ？もう少し俺をほめるように紹介してくれよ。」

「無理だ！啓太のほめるような所は一つもないからな！はははははははははは」

「なんだよ！その不気味な笑いは！それに、俺のほめるべき長所がないだろ？運動馬鹿には言われたくないね！」

俺はむきになって森岡に怒鳴り付けた。しかし、森岡は挑戦的な態度で言った。

「じゃあ、啓太が運動馬鹿に運動で勝ったらほめてやる。ってことで今日の昼休みにグラウンドで100M走だ！ビリだったやつはジュースをおごる！このルールでどうだ？」

チャイムが鳴り、みんなが席につく。

「よし、いいだろう！じゃあ昼休みな！」

そう言っただけで俺も席に着く。

負けなきゃいいんだ。

森岡に勝てばジュースをおごってもらえる。

もはや俺の長所がどう、とかいう事は関係なかった。今まで足の早さでは森岡に負けたことはない。

昼休み

「啓太！行こうぜ、グラウンドに！」

森岡が自信満々な顔で言った。

「森岡、お前には悪いがジュースはおごってもらうからな。」

そして、俺と森岡と速人はグラウンドに到着した。

「着いたぞ。さあ勝負だ！森岡！」

「なあ、啓太。気が付いてないようだから言っておくが走るの俺ではなく速人だぞ？」

「ちよつと待て。走るのが速人ってどういう事だ！」

「俺が走るなんて一言でも言ったか？俺は運動馬鹿に運動で勝たらほめてやると言ったんだ。たしかに、お前をほめるのは俺だが、走るの運動馬鹿だ。運動馬鹿イコール俺ということではない。」

「……………」

はめられた。森岡は人をはめることに関しては何のすごく頭が働く。しかし、俺が速人に勝てば良いんだ。陸上部だかなんだか知らないが勝てば良いんだ。

「まあ、俺が勝てば良いんだろ？さっさと走ろうぜ！」
速人が口を開いた。

「悪いけど手加減は、しないよ。やるからには全力でやる。」

「そっちのほう張り合いがあつておもしろいぜ！」
スタートラインに立つ。精神を集中させて：

「位置に着いて！よいい、ドン！」

俺はその瞬間勢い良く走り出した。

しかし、あつと言う間に速人に抜かされた。

早すぎる、さすが陸上部だ。だが、ジュースはおごってもらうぜ！後半からラストスパートをかけて速人の横に並ぶ。

しかし、どうしても抜けない。そして：

「ゴー——！勝者、速人！記録11秒67！」

負けた。中学三年生とは思えない早さだ。ちなみに俺の記録は11秒77。おいしいと言えばおいしいが負けたことにかわりはない。

「約束どおりジュースはおごってもらうぜ。ちなみに、俺と速人にな！」

「どうしてだ？俺は速人にだけジュースをおごれば良いんじゃないのか？」

「俺がそんなこと言ったか？ 負けたやつはジュースをおごると言ったが誰におごるとは言っていないぞ？ つまり、啓太は俺の作戦に引っ掛かったと言うことだ！ はははははははははは」

「……………わかったよ。二人分おごれば良いんだろ？ ったく、森岡はこうゆうことに関しては頭働くな。」俺は二人にジュースをおごった。勝負には負けたが、森岡の言うとおり、汗をかくと元気がでるし、気持ちがいい。

しかし、ジュースをおごることはくやしい。

ジュース…

ジュース……………

俺は今後ジュースをかける試合はしなくなった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3008b/>

おごりジュース

2010年10月31日04時27分発行